

# スクールオーケストラ創設の実際

小山 裕之 (教育学科)

## The Founding of School Orchestras

Hiroyuki Oyama

Department of Education, Kamakura Women's University

### Abstract

Music teachers have often expressed a desire to let students experience an orchestra (specifically a string orchestra) at school. However, this has been difficult mainly because teachers lack necessary information. Fortunately, this paper's author has been engaged in founding school orchestras for quite some time, and conducted various practical studies.

In this paper, the results of these studies are reported. Additionally, concrete and effective measures, obtained through the experience of founding school orchestras of school, are proposed.

Key words : the strings, introduction to the educational front, practice report,

Leader not specializing in a stringed instrument

キーワード：弦楽器、教育現場への導入、実践報告、弦楽器専門外指導者

### I はじめに

世の中は時代とともに変化する。文明も進化し、そして人間は価値観さえも変化してゆく。しかしながら時代が変わっても変化しない、あるいは変えることなく大切に守り受け継いで行くべきものも存在するのではないだろうか。芸術音楽の役割の一つに音楽を通してその不変の価値あるものを体験し気付かせてくれる事がある。特に人間教育の場である学校においては、本物に触れる体験を通じて感動を味わいながらその不変なものを発見し、人間教育に活かしていく役割がある。

### II 現状と目的

幅広い表現力に富むオーケストラ(含弦楽オーケストラ)は、昔から人々の心に様々な影響を与えて来た。わが国でも1879年、学校における音楽教育研究のために音楽取調掛が設立され、西洋音楽を取り入れることが決定した。それ以来西洋楽器、特にオーケストラは音楽鑑賞には欠かせない存在の一つとして、学校教育現場でも取り上げて来た経緯がある。

さて我が国の現在の学校教育現場に目を向けてみると、音楽活動は正課(授業)、正課外特別活動(クラブ活動)、学校行事等あらゆる場面で様々

な活動の可能性が存在する。その中で中心を占めて演奏されているのは何と言っても吹奏楽、そして合唱である。残念ながらオーケストラ、特に弦楽器は殆ど取り上げられてはいないのが現状である。参考までに連盟の加盟団体数（加盟校数）を記しておく。なおオーケストラ連盟が高等学校部会のみしか存在しないので高等学校で比較した。

全日本吹奏楽連盟 高等学校部会	3,811団体（平成24年10月現在、全日本吹奏楽連盟調べ）
全日本合唱連盟 高等学校部会	854団体（平成25年1月現在、全日本合唱連盟調べ）
全日本高等学校オーケストラ連盟	90団体（平成25年5月現在、全日本高等学校オーケストラ連盟調べ）

しかしながら小・中・高等学校においてオーケストラ、特に弦楽器活動を実践出来る可能性は決して少なくはない。まず筆者の教育現場でのオーケストラ創りの経験から、以下のように、管理職や他の教師、保護者等の周囲からの理解を求めたり解決すべき事項を挙げる事が出来る。

- (1) 管理職からの応援
- (2) 管弦楽とその楽器の技術的向上
- (3) 一つの学校に存在する吹奏楽と管弦楽との関係
- (4) 管弦楽は楽器が高額と捉えられがちであり他の部活動との予算的配分の問題
- (5) 周囲へ活動内容や成果を賞や数字等の目に見える形での提示が難しい。
- (6) 管弦楽活動と勉強にかかる時間のバランスの問題。

以上は、なかなか解決には難しいと考えられがちである。そして特に指導者である音楽教師が、以下のように持ち合わせている不安材料がなかなかオーケストラに挑戦する機会を少なくしていることも事実である。

- (1) それぞれの楽器奏法、指導法の具体的なイメージが湧かない。
- (2) 技術的に、幼少時から個人レッスンを行わないと演奏困難と考えがちである。しかしながら、高校の部活動で始めた演奏でも管弦楽祭等で見事な演奏が存在する。
- (3) オーケストラや弦楽器を専門とする指導者

は絶対数が少ない。

- (4) オーケストラや弦楽器は難しいというイメージから、専門外では指導困難と考える。しかしながら、全国高等学校選抜オーケストラフェスタに出場しているオーケストラ部顧問・指揮者の専門は、声楽や教育音楽、更には他教科という顧問も多く存在している。（筆者が全国高等学校オーケストラ連盟理事時代の各指導者からの情報による）
- (5) 楽器が高額で、学校に理解を求めて取り揃えるのは困難と考える。だが意外と安価で購入は可能である。初心者であればバイオリン、ピオラは5～10万円、チェロは10～20万円位でも十分使用できる。コントラバスも最近では10万円程の楽器も出ていて筆者も使用してみたが問題なかった。

しかしながら、永年の教育現場でのオーケストラ創りの経験から、このような問題点は適切な方法と手順により間違いなく解決出来ると言えよう。また前述のような不安を抱える音楽教師でも、直接インタビューで意見を聞いて見ると次のような意見も多数存在した。

- |  |
|--|
| ○オーケストラは何と言っても、やはり音楽の最高形態である。                              |
| ○機会があればオーケストラをぜひ子供達に体験させたい。                                |
| ○出来るのならオーケストラを指揮・指導したいのだが、諸事情を考えるとなかなか困難なので吹奏楽指導の方を行なっている。 |

筆者は永年学校教育現場で音楽教育に携わって来た際に、前述のようにオーケストラをやりたくても分からないことや困難なことが多すぎて、どうしても躊躇してしまう先生方に多く出会った。本論文の目的は、筆者が19年間教育現場でオーケストラ創りの実践研究して来たことの報告と、成功するオーケストラ創りのノウハウ、アイデアを具体的に提示することにある。小学校、中学校、高等学校においてオーケストラ活動も取り入れられ、より豊かな学校教育が実践出来ることを望んでいる。

### III 論述方法

平成6年4月から平成21年3月まで15年間の宮城県公立高等学校での実践結果報告と、合わせて平成21年4月から平成25年度現在までの鎌倉女子大学での研究（ゼミナールと同好会の機会）結果も交えて報告したい。最後にその実践研究の成果から導き出されたスクールオーケストラ創設の効果的、実践的具体的方策を提示したい。

### IV 本論

1. 平成20年6月改定の文部科学省から出された小学校学習指導要領解説の中で次のような一文が掲載されている。「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる『知識基盤社会』の時代であると言われている。」この一節が象徴するように、現代はITの進歩もありグローバル化の時代であり、それぞれの文化もグローバル化され知識中心のそして経済が優先される時代となった。

しかしながら、小・中・高等学校学習指導要領の音楽（高等学校では芸術科）全てにおいて「目標」の最後に『豊かな情操を養う』とされている。そして「情操」に関する解説の最後には次の一文が掲げられている。「このような美しさを受容し求める心は、美だけに限らずより善なるものや崇高なるものに対する心、すなわち、他の価値に対しても通じるものである。したがって、教科の目標では美的情操を養うことを中心にはするものの、学校教育の目標が、豊かな人間性の育成を目指すものであるところから、ここでは、豊かな情操を養うことを示しているのである。すなわち、『豊かな情操を養う』ことは、一人一人の豊かな心を育てるという重要な意味をもっているのである。」

この一文から、音楽教育の目標は豊かな情操を養うことにある、と解釈して間違いないだろう。現代の知識基盤社会だからこそ、芸術教育は人間の『心の教育』である情操を今迄以上に大切にしたいものである。そしてその豊かな情

操を養うための創意工夫が音楽教育では必要且つ重要となって来るのである。

そしてその工夫の一環として、もし可能であればオーケストラを学校教育に取り入れてみてはどうかと考えた。オーケストラは長い歴史の中で様々な芸術的要素を育んできた。そして洋の東西を問わず人々の心に少なからず影響を与え続けて来た。幅広い表現力を持つオーケストラを少しでも理解し、自ら体験することが出来たなら子どもの情操はさらに豊かなものに発展することと確信する。

さて、現在日本の学校教育現場において、何と言っても盛んな音楽活動は前述の通り、合唱と吹奏楽である。人間の声を使用した合唱音楽は音楽教育にも極めて有効且つ重要であるし、扱いが身近なため容易に学校教育に取り入れられてきた。また器楽分野での吹奏楽は学校教育に身近に貢献してきた。理由は、弦楽器よりも演奏がしやすく、ポップスをはじめ様々なジャンルの演奏が可能だからである。また野球の応援など屋外での演奏も可能なため学校教育には容易に取り入れられて来た。それらと比較して管弦楽が日本の学校教育に取り入れられ発展してきた時代は未だ嘗て一度も見受けられない。これまでの数少ない歴史は、オーケストラを指導できる特殊な一部の音楽教師の意欲に委ねられて、現在まで学校教育のオーケストラの成果を作り上げて来たのである。

#### 参考

全国でオーケストラ活動を実施している高等学校は平成13年4月現在、205校あった。引用文献【小山裕之（2002）】

もし学校教育にオーケストラ（特に弦楽器）を加えることが出来るとすれば、子ども達が「効果的努力により大きな目標を実現できるという達成感」を経験出来る良い機会となり、そしてこのことが教育の有効性にも繋がると考える。また弦楽器は音程、音色その他音楽の要素は全て自分の努力によってしか実現できない。換言すると音程、音色等は段階の相違はあっても全て自分が作り上げた以外の何物でもないの

である。学校において、芸術鑑賞会や音楽の授業で聴いてきたオーケストラを、鑑賞するだけではなく自分が自分の努力で作上げた美しい音で本物を奏でる喜びは非常に得難い貴重な体験であり、子ども達の大きな感動にも繋がっている。(引用文献【小山裕之(2002)】の中の生徒の感想文を参照)

以上を踏まえて、吹奏楽や合唱に加えオーケストラも学校教育現場の音楽教育に取り入れる事が出来たなら、更に充実した情操教育が可能になるのではないかと考える。以下の各校での実践報告により学校現場に普及しづらい状況にあるオーケストラであるが、その経験のない音楽教師でもオーケストラを組織し、指導運営出来るアイディアを実践報告により提供したいと考える。

なお今回は、オーケストラの中でも特に弦楽オーケストラを中心に述べたい。

## 2. 各校での実践研究報告

### (1) 宮城県立 A 高等学校 [在職 平成6年2月～平成10年3月]

#### 学校の概要

平成6年4月に開校。今年で19年目になる比較的新しい学校。仙台市の郊外、新興住宅地内に位置し設備の整った共学校。卒業後は進学者の多い普通科の高等学校である。

#### 音楽関係

開校当時から現在も、授業ではバイオリンを取り入れている。音楽大学に進学する者もいる。音楽系の部活動は吹奏楽部、合唱部、弦楽合奏部がありいずれも非常に盛んである。

#### 実践報告

平成6年2月、開校前から赴任し、学校作りの計画から始まった。学校全体としては進学校を目指すことになり、仙台北地区から意欲のある生徒を確保した。音楽教師は筆者だけの1名。当初は吹奏楽部、合唱部、弦楽合奏同好会の3つの部活動の顧問となった。合唱部は最初から作ったが、管弦楽と吹奏楽の2つの部の存在はなかなか運営が難しい面もあるので、本来なら新しい学校らしく管弦楽部のみで出発したかった。しかし当校の

属する町はマーチングバンドの盛んな町であり、吹奏楽(特にマーチングバンド)に対して町から楽器購入資金の援助を受けていたので、「吹奏楽」という名称を使わざるを得なかった。そしてこのような理由から、敢えて「管弦楽」にせず「弦楽合奏」で出発し、将来的に管弦楽に持っていくことを想定した。

#### 授業での実践

人文、国際、理数の3コースを置く普通科だが、音楽の授業はコースにより異なる。音楽大学受験クラスは、演奏実技やソルフェージュ、楽典等を設定したが、音楽Ⅰと音楽Ⅱの器楽分野においてはリコーダーやギターではなくバイオリンを導入した。毎週1回2時間の続きの場合は1時間をバイオリンに充てた。週1時間のクラスは隔週でバイオリンを行った。

楽器：Suzukiのバイオリンセットを1丁5万円で購入した。当初は4～5名のグループに1丁、次に2名に1丁、そして1人に1丁と増やして行った。

テキスト：生徒の殆どが初心者であることから、ゼロからの入門用テキストを自分で作成した。(引用文献【小山裕之(2002)】を参照のこと。)また、コースにより異なるが、音楽Ⅰなどのバイオリン1年目のクラスでは、「新しいバイオリン教本=1」編者兎束龍夫、篠崎弘嗣、鷺見三郎、出版社音楽之友社を使用した。2年目は「新しいバイオリン教本=2」編者兎束龍夫、篠崎弘嗣、鷺見三郎、同出版社または「Violin School Book:1」編著者森本琢郎、出版社ドレミ楽譜出版社を使用した。

授業内容：テキストに沿って進めた。1年目の最後には二重奏も行い試験も行なった。二重奏の曲目は「ちょうちょ」、「エーデルワイス」、(いずれもこちらで編曲)、「ロング・ロング・アゴー」。2年目の試験ではピアノ伴奏つき独奏、または無伴奏で二重奏のどちらかを選択させた。ピアノ伴奏者や二重奏のパートナーは生徒同士を自由に組ませてアンサンブルの練習も兼ねた。曲目はテキストの中から選択させた。

2年目の試験で生徒が選択した主な曲目

- ・P.アンカ：ザ・ロンゲスト・デイ
- ・ケーラー：子守歌
- ・ツィリッヒ：小川の水準
- ・本田鉄磨：思い出のアルバム
- ・ヴォーン・ホートン：モッキン・バード・ヒル
- ・メキシコ民謡：チアパネカス
- ・モーツァルト：かわいいメヌエット

他

試験の1週間程前からは音楽室が自主練習に訪れた生徒で満杯になる状況だった。バイオリンに対する生徒の反応は大変良く、楽しんでやっていたようである。詳しい生徒の感想は次論文を参照のこと。(引用文献【小山裕之(2001)】)

考察：何と言っても憧れのバイオリンを実際に触れられる事だけでも、生徒達は大きな喜びを感じていた。また生徒の感想から、新設校ということで生徒の意識の中では新しいことへの挑戦の準備が出来ていたと分析できる。

部活動での実践

新設1年目から2名の生徒に声をかけ、同好会として出発した。掛け持ちしている合唱部の生徒が加わり、十数名で弦楽合奏を行なった。なかなか思うように弾けずに苦勞する合唱部の生徒もいたが、徐々にコツをつかみ弾けるようになってきた。授業の生徒でもっとやりたいという生徒が数名入部してきたので、ピアノやチェロ、コントラバスも購入して弦楽合奏の態形が出来上がった。また4年目にはホルン、トランペットなどの管楽器を少しずつ加えて管弦楽も体験してみた。なお殆どが女子生徒であり男子生徒はごく僅かであった。

主な曲；・E.Elgar: Six Very Easy Pieces Op.22

- ・バッハ：G線上のアリア
- ・パッヘルベル：カノン（簡易版）
- ・A.メンケン：ホール・ニュー・ワールド

他

主な本番；・文化祭での発表

- ・施設などへの慰問コンサート
- ・宮城県高等学校音楽祭

成果

①生徒

バイオリンなどの弦楽器を一度も触れたことがない生徒が殆どだったが、授業で取り入れた事により多くの生徒が体験する事が出来た。また生徒の感想を見ても体験できた喜びと感動は大変大きかった。(引用文献【小山裕之(2001)】)

②他校に与えた影響

当時宮城県内で管弦楽団や弦楽合奏団を持つ高等学校は殆ど存在しなかった。特に公立高校において授業にバイオリンを導入している学校は一枚もなかった。そのような中でA高校の存在は珍しい貴重な存在であり、県内でも徐々に弦楽器や管弦楽を行う高等学校が出て来た。

③校内での好影響

弦楽合奏部員だった生徒が卒業後も弦楽器を継続している生徒が数多く見られた。例；大学でも管弦楽団に入団した。個人で楽器を購入して習いに行っている等。また音楽関係の水準が著しく向上した。合唱部や吹奏楽部に与えた影響力は大きく、両部の活動はより活発になった。卒業後の進路も音楽大学に進学し、その後も音楽教諭や演奏家になった卒業生も出て来た。さらに授業でバイオリンを行なっている学校、弦楽オーケストをもつ学校ということで、学校全体にも少なからず影響を与えていたことが校長のコメントから確認された。

④地域への影響

A高校の所在する町がこの事に理解と歓迎の意を示し、町主催のお祭りやイベントにも声がかかるようになった。また町で第九を歌う会が発足しA高校が主となりオーケストラを担当するようになった。

工夫した点

①弦楽器の経験者よりも未経験者を想定し育てることを常に意識した。

②授業と部活動の関連性を考えた。授業側から見ると、音楽選択者全員が体験するものであるが、バイオリンが面白く感じられるようになり、さらに発展して勉強したい生徒が多数出て来た。そのような生徒に部活動の機会を提供した。ま

た部活動側から見ると、部員数確保の方法として授業でバイオリンを行っていると基礎を身に付け、弦楽器に興味のある初心者が継続的に入部して来る。

③合唱部員と弦楽合奏部員のメンバーを同じにした。声と弦は鳴らし方に共通点があり、どちらも学ぶと関連付けて理解出来るので両方の上達が早い。また勿論両部の部員数確保のためにも有効である。

④楽器に番号を振り、家に持ち帰って練習させた。

⑤バイオリンの奏法に関して技術的な指導をお願いしたり、他教科でチェロの得意な先生に応援を頂いた。

#### 苦勞した点

##### ①吹奏楽部との関係

- ・同じ器楽ということ、また管弦楽は管楽器が入るので部員獲得に関して特にお互いが意識した。
- ・楽器の貸し借り、部員のお手伝い等で顧問同士の協力関係、調整が難しい。
- ・吹奏楽部員の生徒はどうしても管弦楽団との関係を構えてしまう。

②管理職や一般教員からなかなか理解を得られなかった。特に部活動顧問からは、同好会から部昇格に関して賛成意見が少なく、管弦楽部昇格に関しては最後まで実現は難しかった。理由は、やはり吹奏楽部が既に存在するのだからそれで十分だという考え方があった。また管弦楽団が出来ると部活動予算を大幅に消費し、他部の予算が減らされてしまうのでは、という懸念が蔓延した。

#### 反省点、浮き彫りとなった課題

①色々なしながらみはあったが新設校という希少な機会なので、最初から「吹奏楽部」という名称ではなく「管弦楽部」という名称を用いるべきだった。

②オーケストラ創りを実現するためには、金銭面だけでなく様々な面での援助者が必要である。校内外にもう少し賛同者を得る努力も必要だったと思われる。

③開校から4年目で転勤の話が来た。授業も部活動もユニークな取り組みだけに、可能であれば軌道に乗るまでのあと数年間は私が責任を持って育てるべきだった。

#### 考察

やはり何と言っても新設校という稀な機会が後押しをした。生徒や周りの意識も新しい取り組みに挑戦するという心の準備が出来上がっていた。

(2) 宮城県立 B 高等学校 [在職 平成10年4月 ~ 平成15年3月]

#### 学校の概要

明治25年4月開校。今年で121年目を迎える男子のみの伝統校（現在は共学）。仙台市の中心部に位置し、新校舎に建て替えて間もない大変優れた教育環境にあった（当時）。

#### 音楽関係

全ての科目で本格的に大変良く勉強しているが、音楽関係でも音楽大学に進み、その後も演奏家、教育者として第一線で活躍している。音楽系の部活動は吹奏楽部、合唱部、ギター部、室内楽部があり大変活発に活動している。

#### 実践報告

前任校のような新しい学校とは違い、昔からの伝統校そして県内トップクラスの進学校である。音楽だけが特出している訳ではないが、生徒の能力は高く仮に楽譜が読めない生徒でもすぐに学習する能力を持っていた。前任校と同じで音楽教師は筆者1名のみだった。そのため部活動顧問は、当初吹奏楽部と合唱部の2つを持ち、室内楽部の顧問となった時点で合唱部との2つを受け持った。授業での実践

全員1年生で音楽Ⅰが必修2単位。音楽Ⅱは3年生で選択できる。音楽Ⅱは音大受験クラスのため演奏法、楽典、ソルフェージュ等。音楽Ⅰは歌と鑑賞中心の授業を行なった。バイオリンの授業は体験のために数回行う程度に留まった。その一番の理由は、最低20丁は必要とされる楽器購入はほぼ不可能であることが判明したからである。しかしながら進学校の男子でも、バイオリンには興味を示し楽しく弾いていた。

以下に、宮城県教育委員会主催、教職経験者高

等学校5年経過者に対する研究授業においてバイオリンを行なった時の生徒の感想を紹介する。

・「今回のバイオリン授業はとても楽しかった。一度もさわられたことのない楽器にさわられたことが、とても良かった。なかなかちゃんとした音が出なくて大変だったけど、授業中に少しはちゃんとした音が出るようになって良かったと思う。」

・「今回の授業で僕は初めてバイオリンに触れたのですが、非常に面白かったです。このような経験は小中学校では出来なかったので、とてもいい経験になりました。もう一度バイオリンに触れてみたいです。音楽の授業は歌と鑑賞だけなので、器楽としてバイオリンを何時間か見越してやったら面白いと思います。」

・「バイオリンを触って初めての感想は、意外と簡単に音が出せたということです。適当にやっても、少しはそれらしくなるし、今まではもっとかたいものだと思っていたけど、あれだったらもっと使い道があると思います。もっといろんな場所で使えばいいのかな、と思いました。」

・「おもしろかった。バイオリンは練習しなければ音が出ないと思っていたので、すぐ音が出て驚いた。あまりバイオリンを弾く機会はないと思うので、いい体験になった。」

・「研究授業で初めてバイオリンをさわった。おもしろかった。ムズかしそうに思っていたけど、わりとすんなりと音が出てうれしかった。楽しかったから、機会があったらまた弾いてみたいと思う。」

・「授業前は、ただバイオリンを触ってみて遊んでみる、というふう聞いていたので、2時間の授業はどうゆうものになるかと考えていたが、その2時間は実際短く感じて充実していたと思う。初めて触れるものだったし、イメージとしては高貴な楽器というふうに感じていたので、このように楽器をいじくことは、やっていて飽きなかったし、とても面白かった。また自分は楽器はうまくないし、興味も持っていなかったが、未知な楽器と接することで、もしかしたら自分にもこのような才能があるのでは、といったように想像を膨らませたりすることができたので、とても興味ある時間だった。」

・「初めてバイオリンを弾いて、弾くのは簡単だと思っていたが、最初はろくに音も出せず、こんなに難しいものかと思った。しかし先生に教えてもらうたびに、だんだん音が出るようになって最後にはメリーさんの

羊を、ほんの少し弾けるようになって面白かった。今後バイオリンを弾ける機会があったら、また弾きたいと思った。」

・「バイオリンの弾き方を、なんとなくは知っていたけれど、初めて本物を手に取った時には感動した。結論から言うとバイオリンの世界は深いなあと感じさせられた。バイオリンを初めて弾いてみて、やっぱりバイオリンの音色は素晴らしいと思った。あまりうまくはできなかったが、本物に触れることができたので良かった。機会があったらまたやってみてみたいと思う。」

・「初めてバイオリンを弾いて面白かった。うまく弾けなかったけど、自分で実習をするのはいつもより面白かった。もっと先に進みたい気がした。毎回バイオリンがいいなと思った。」

・「生まれて初めてバイオリンをさわりました。最初はきたない音を出すのかなと思っていたけれど、意外にも結構きれいな音が出ました。自分にとって遠い存在だと思っていたバイオリンがとても身近に感じられました。研究授業ということで今回バイオリンに触ってみたけど、また触ってみたいと思いました。とても楽しかったです。」

・「自分はもし何か楽器が弾けるようになるとしたら、バイオリンが弾けるようになりたいと答える程この楽器が好きである。小学生の頃、友人が弾いているのを見てカッコイイと思ったのが始まりだったように思う。機会があれば練習して弾けるようになりたいと常々思っていたので、今回の実習は実にありがたかった。楽しみに待っていたので授業も楽しく臨むことができた。今後自分にゆとりができたなら、ぜひバイオリンを練習したいと思う。そしていつか、それなりに弾けるようになりたいと思う。」

・「バイオリンに実際に触れるのは初めてだった。普段は手にする事は勿論、目にする事もあまりなかったので、今回の体験は貴重なものとなった。短い時間ではあったが、自分の手で持って弾いてみるとバイオリンの奥深さを感じた。バイオリンと言えば優雅で高級な楽器という印象が強かったが、僕のような者でも受け入れてくれた。バイオリンについて色々新しいことを知った。本当に今回は貴重な体験だった。ぜひまた機会があれば、またバイオリンを弾いてみたい。」

#### 部活動での実践

もともと室内楽部という部活動は存在していたが、ピアノやバイオリンを習っている生徒が個人

で活動している部だった。部員数も数名と決して多くはない。筆者が赴任した時、自分の楽器を1人の生徒に貸与し個人指導から始めて、結局は室内楽部の内容を弦楽合奏に変えて行った。読譜の苦手な生徒もいたが、徐々に克服して5年目は20名程で弦楽合奏が出来るようになった。

主な曲 ; ・A.メンケン：ホール・ニュー・ワールド  
 ・Mozart：Eine kleine Nachtmusik K.525  
 (第1楽章)  
 ・G.Holst：Brook Green Suite 他  
 主な本番；・文化祭での発表  
 ・宮城県高等学校音楽祭

### 成果

- ①伝統校なので新しいことを取り入れるには覚悟が必要だった。弦楽合奏団作りは段階を経て実現した。
- ②生徒のレベルが高いせいか個人個人が毎日よく練習し上達した。仕上がりの曲も完成度が高かった。
- ③殆どの生徒が、バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスを自分の楽器として購入した。

### 工夫した点

- ①生徒は自分達でやりたがるので、自主性を重んじて個人個人が弾けるようになるまで辛抱強く待ち、それから合奏をするようにした。
- ②チェロの講師を数回招いて技術指導を頂いた。

### 苦労した点

- ①沢山の楽器購入は不可能だったので、生徒に自分持ちの楽器を購入するよう促した。
- ②やはり吹奏楽部は伝統があり存在が大かったので、音楽室占有等様々な面で室内楽部は窮屈だった。

### 反省点

ある意味で伝統校に新しい価値観を定着させることは難しい。性急ではなくじっくり時間をかけて取り組んだ方が定着する。

(3) 宮城県立 C 高等学校 [在職 平成15年4月～平成21年3月]

### 学校の概要

平成7年4月に開校。今年で18年目になる比較的新しい学校である。仙台市東部の住宅地に位置し設備の整った共学校。当時新しいタイプの高等学校として誕生した。校則や部活動もない自由な校風であり、普通科、総合学科、美術科を持つ進学校である。

### 音楽関係

音楽関係に進む者も多い。部活動はやらない学校の方針なのだが、自主サークルとしての活動は認められている。ただし原則として対外活動、試合、コンクール等は禁止である。音楽系のサークルは軽音楽、吹奏楽、合唱、ピアノ、弦楽器、和太鼓、ジャズ等年度によっても異なるが沢山の音楽サークルが存在した。バンド活動が音楽室で存分に活動出来るという全国でも珍しい環境にあったので、軽音楽と吹奏楽が特に盛んである。

### 実践報告

開校9年目に2代目の音楽教諭として赴任した。自由な校風なので、授業もサークルも様々な可能性があった。サークル顧問は軽音楽、吹奏楽、合唱、弦楽器と4つを受け持った。ポイントは、前述のA高等学校と同じ時期に出来たタイプの異なる学校だったので、授業に関しては殆ど同じテキスト、内容で比較実践を試みた。またオーケストラに関しては、弦楽合奏から出発したものの、前2校の体験結果を活かして早い段階から管楽器を加えてのフルオーケストラで活動した。

### 授業での実践

学科、コースにより様々なカリキュラムが準備されており、概ね1年生で「音楽Ⅰ」、3年生で「音楽Ⅱ」、「音楽理論」、「ソルフェージュ」、「音楽史」が選択できる。音楽Ⅰでバイオリンを取り入れた。2時間続きの1時間をバイオリンに充てて、年間通して行った。

楽器：Suzukiのアウトフィットバイオリンセットを1丁5万円に割引いてもらい購入した。教科予算で購入し2名に1丁渡るように22丁購入した。

テキスト：C高校の生徒も殆どが初心者であることから、A高校と同じゼロからの自作入門テキストを使用した。引用文献【小山裕之(2001)】

を参照。また音楽Ⅰのバイオリンの授業では、「新しいバイオリン教本＝1」編者兎束龍夫、篠崎弘嗣、鷺見三郎、出版社音楽之友社を使用した。授業内容：テキストに沿って進めた。1年目の最後には二重奏も行い試験も行なった。二重奏の曲目は「ちょうちょ」（こちらで編曲）等部活動での実践

既存の弦楽器サークルを膨らませる形をとった。赴任当時は初心者バイオリン、チェロが3名在籍していたが、新入生を入部させてすぐに10名を超えた。熱心に練習したので上達は早かった。フルートの生徒が1名入部してきたので、バッハの管弦楽組曲第2番のソロをやらせた。フルート、クラリネットを持っている生徒を入れ、さらにホルン、トランペット1名ずつを加えてオーケストラ曲をやってみた。演奏を聞いて自分持ちのオーボエやトロンボーンも入部してきた。ファゴットやAクラリネットを調達し、一気に30名を超える本格的な管弦楽が誕生した。

主な曲；

- 弦楽合奏・A.メンケン：ホール・ニュー・ワールド
- 管弦楽・バッハ：管弦楽組曲 第2番より抜粋
  - ・ウエーバー：コンサートマーチ
  - ・ハイドン：交響曲 第104番「ロンドン」
  - ・ベートーベン：交響曲 第1番
  - ・ベートーベン：交響曲 第5番「運命」（編曲版とオリジナル版）
  - ・チャイコフスキー：バレエ組曲くるみ割り人形より「花のワルツ」
  - ・オペラ座の怪人
  - ・佐藤真：「大地の歌」より第7楽章大地讃頌

主な本番；・文化祭での発表

- ・創立10周年記念式典での演奏
- ・校内ロビーコンサート
- ・入学式、卒業式での演奏
- ・宮城県高等学校音楽祭
- ・宮城県合奏コンクール（銀賞）

成果

授業にバイオリンを取り入れたが、やはり殆ど

の生徒が楽しく弾いていた。そしてもっとやりたいと思う生徒が管弦楽サークルに沢山入部して来た。一番の成果は、管弦楽のある学校となり、入学式や卒業式での演奏は勿論のこと対外活動の出来ない学校が、その頑張りを認めるようになった。創立10周年記念式典が開催された時には、音楽選択者120名の生徒による混声合唱と管弦楽サークルを中心に吹奏楽の管楽器も加えて80名を超えるオーケストラとの共演で、佐藤真作曲の「大地讃頌」を盛大に演奏することができ、校内外に深い感銘を与えた。また管弦楽団は（名称を「宮城野フィルハーモニー」と言う）生徒にとっても大きな喜びとなり、管弦楽サークルからヨーロッパの音大に進みバイオリンを続けている男子も存在した。

工夫した点

- ・放課後講座や一日体験入学等あらゆる機会にバイオリンの体験、紹介を設定した。
- ・管弦楽は出来るだけクラシックの正統派の曲を選択し、またオリジナルにこだわった。
- ・演奏レベルを第一に設定してしまうとなかなか前進しないので、まず管弦楽という形を作り、それから徐々に技術面を整えて行くことに徹底した。

苦労した点

- ・自由な校風のユニークな高校なので、オーケストラも単なるパフォーマンスの一つと捉えられがちであった。
- ・赴任当時は軽音楽部（ロックバンド活動）が音楽室を占有していたのには閉口した。徐々に芸術音楽も響く音楽室環境を作って行った。
- ・対外活動禁止の学校だったので、演奏会や県音楽祭に出演する価値、さらに他校との交流、地域への貢献など学校教育の根本理念の重要性を実践で働きかけた。
- ・部活動のない学校なので、（サークル活動とは異なる）継続的な毎日の練習や努力する大切さの意識がなかった。音楽的見地からその重要性を説いた。

反省点・浮き彫りとなった課題

- ・自由奔放な校風で生徒主体の学校な中で、教師

サイドから様々な可能性を提案し続けたが、校風にはあまりそぐわなかった。

- ようやくオーケストラの形は出来上がってきたが、演奏技術面で物足りなさが残った。
- 音楽芸術の神髄である発表の重要性を校内で具体的に示せなかった。

## V 結論

15年間に渡る3校での実践内容を具体的に述べて来たが、総括してオーケストラ創りのポイント、留意点等をまとめた。また平成21年4月より現在も鎌倉女子大学において（オーケストラゼミナール、管弦楽同好会）オーケストラ創りについて実践研究中である。その成果も合わせて提示したい。なお前述のように今回は主に弦楽オーケストラについて述べることにする。

### 1. 楽器に関して

先にも触れたが、初心者として十分と思える楽器価格について紹介する。バイオリン、ピオラはセットで5～10万円、チェロは10～20万円、コントラバスは10万～30万円で購入できる。その他肩当て、チューニングメーター等も準備すると良い。毛替は2～3年に一度でも十分である。

### 2. 曲目に関して

幼少時より個人レッスンで習うメソッドとは別のルートが必要である。入門時は同じでも良いし、平易な曲の編曲でも構わないが、沢山の良いメソッドが市販されている。大切なのは、弦楽器の基礎の重要性は承知の上、ボウイングやスケールの基礎練習と共に早めに弦楽合奏曲に入ってしまうことである。初心者用で筆者が3校共通で取り上げて成功した曲を紹介する。

- ベートーベン：「喜びの歌」（二重奏）
- ビバルディ：「四季」より「春」（リコーダー版よりの編曲）
- A.メンケン：ホール・ニュー・ワールド

### 3. 技術面に関して

- (1) 「弦楽器も管楽器も容易に教えることが出来るものである。初心者の弦楽グループが学生保護者も楽しむことが出来る程の良い響きを出す

ことができる。それはあたかも楽団のように。」引用文献【竹内俊一翻訳（1997）】筆者も前述の通り、実践経験を通して、この事実を実感出来た。

- (2) 「最終的に生徒は質の高い指導を求めているし、それを目指すことが存続のために不可欠である。」（引用文献【竹内俊一翻訳（1997）】）

- (3) 指板にシールを貼った方がより早く正確にポジションを覚えることが出来る。（引用文献【奈良秀樹（2004）】）

- (4) パート譜には、ボウイング記号の他に全ての音に指番号を書き込ませ、更にもどの弦を弾くかカラーペンで色分けをさせた。（鎌倉女子大学におけるオーケストラゼミナールでの実践）

- (5) やはり何と言っても弦楽器は基礎が大切であるし、少しでも多く楽器に触れている学生の方が目に見えて上達が早かった。（鎌倉女子大学オーケストラゼミナールと管弦楽同好会の両方で確認）

- (6) 今迄の実践成果から分析して、偏差値の高い生徒、読譜力のある生徒が必ずしも上達が早いとは限らなかった。但し絶対音感を持ち合わせている生徒は音程が取り易かった。

- (7) 生徒には複数で練習させた方が様々な面で良い結果が得られる。特に先輩や習っていて少しでも弾ける生徒と一緒に、さらに上達が速い。

### 4. 周囲との関係について

- (1) 学校現場においては何と言っても管理職（校長）や他の教師、保護者、卒業生等から理解を得ることが不可欠である。子ども達、学校、地域にとって価値ある素晴らしい活動であることを、誠意を持って辛抱強く説明を続けて行く必要がある。同時に学校現場においては、幅広い教育活動を自ら進んで行う積極的姿勢も大切である。

- (2) 吹奏楽との関係が大切である。吹奏楽と協力関係にあるのとそうでないのでは活動、発展に大きな差が出てくる。まず顧問同士の良い関係が非常に大切である。引用文献（【竹内俊一翻訳（1997）】）

(3) 勿論熱意を持ち、一人でオーケストラ創りにあたるのも必要だが、校内にぜひ援助者を得ると良い。そのためには普段から機会を見て、何をしているのかを分かるように説明しておくべきである。

#### 5. その他に関して

(1) オーケストラ活動を実践するには部活動等の課外活動での機会が良い。理由は幾つかあるが、一番の大きな理由は生徒の義務感ではなく、弦楽器に興味を示す姿勢が極めて大切だからである。

(2) 安定運営の見地からも、可能なら授業でも弦楽器を体験させたい。そして、更にやりたい生徒を部活動の機会で伸ばしていくのも大変良い方法である。

(3) 技術面を先行させず、まず弦楽合奏の形態を作ってしまう方が先決である。

(4) 音楽芸術は何と言っても人に聴いて頂く機会が大切である。仕上がりの出来にあまり捕らわれずにコンサートで演奏する機会を沢山持つことである。

(5) 指導は弦楽器経験者でなくとも十分に可能である。そして各パートのさらなる上達には楽器ごとの指導者をお願いするのも一つの方策である。その際個人レッスンに限らず、同じパート内のグループレッスンでも十分な効果が得られる。

(6) そして何より大切なのは生徒達がオーケストラを、弦楽をやりたいという意識を持つことである。指導者はオーケストラ、弦楽に興味を持ってもらえるように、その魅力を様々な工夫を凝らして伝える努力が不可欠なのである。

#### VI おわりに

前述の3校は現在も管弦楽、弦楽オーケストラを継続していて、更に発展充実した活動を行なっている。主なコンサート出演は以下の通り；定期演奏会、高等学校文化連盟全国大会に県代表として出演、全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、県高等学校管弦楽祭、ボランティアコンサート等である。また演奏曲目も次のように本格的な曲を

演奏するようになった；チャイコフスキー：弦楽セレナーデ、ドボルザーク：弦楽セレナーデ、ヘンデル：メサイア（合唱付）、ビゼー：カルメン、シューベルト：交響曲第7番『未完成』等。また他校、地域に与える影響も大きく、県内ではオーケストラ、弦楽オーケストラに挑戦し精力的に活動する学校も増えた。

最後に、この論文での実践報告を参考に、少しでも多くの学校でオーケストラや弦楽合奏に挑戦して頂けたら幸甚である。因みに筆者も専攻は声楽である。全国の学校でオーケストラの美しい音色が響きわたることを願って止まない。

#### VII 引用文献

- 1 MUSIC EDUCATORS NATIONAL CONFERENCE 1994 “STRATEGIES FOR SUCCESS IN THE BAND AND ORCHESTRA” 「公立学校における音楽授業としてのバンドとオーケストラ教育を成功させるための方略(1)」 1997 竹内俊一 翻訳
2. 奈良秀樹 2004 「中学校音楽科における弦楽器導入の意義と実践法の提案」
3. 小山裕之 2001 「高校普通授業におけるヴァイオリン導入の可能性 —新設校・富谷高校における実践例を通して—」 論文
4. 小山裕之 2002 「高等学校教育現場におけるオーケストラ活動の可能性～全国高等学校オーケストラ活動校へのアンケート調査をもとに～」 修士論文

#### 要旨

素晴らしい音楽芸術の一つとされて来たオーケストラ（含弦楽オーケストラ）を、学校教育現場でも体験させたいという教師の願いは存在したが、情報不足等のためになかなか実現困難の状況が続いて来た。幸いにして筆者が永年学校教育現場でオーケストラ作りに携わり様々な実践研究を行ってきた。今回その実践結果を報告すると共に、体験から見えて来た具体的、効果的の方策を提示するものである。結果的にスクールオーケストラ創設

から指導運営まで、効果的方策と少しの工夫により弦楽器経験のない音楽教員でも十分に指導が可能なのである。現在教育現場に求められている大切なものをオーケストラを通して育んで行くことを願うものである。

(2013年9月27日受稿)